

新領域「希望（のぞみ）」

グローバルな視点を持った直接的体験学習の開発に関する研究

—ピースプロジェクトの学習を中心に—

松尾 砂織

1 はじめに

本学校園では、9年生の総合的な学習の時間で、「ピースプロジェクト」を実施している。これは、文部科学省の研究開発校に指定を受けて開発した単元であり、2004年以降ずっと続けてきた「エスコートプロジェクト」を改名したものである。かつて本学校園が提唱した21世紀型学力の1つが国際的コミュニケーション能力であった。本学校園ではこれを「確かな学力を基に、様々なメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」と定義し2006年度から7年間題材開発とカリキュラム開発を進め、一定の成果をあげてきた。

「ピースプロジェクト」の目的は、外国から訪問される方たちに、中学生が広島平和記念公園にある碑を案内する活動を通して、自分にとっての平和は何か、また世界平和とは何かについて考えることである。また、外国の方々と積極的にかかわり、相手の立場に立ったコミュニケーションができるような若い未来の地球市民を育てることも目的としている。外国の方々と交流するためには、言語や文化、考え方の違いを受け入れ、グローバルな視点で物事を捉えることが必要になってくる。また、双方向の意見交流を成立させるためには自分なりの意見を持って表現するだけでなく、相手の考え聞き、受け入れたり、共感しようとしたりする柔軟な対応が求められるため、言語によるコミュニケーション力だけでなく、他者と協働してプロジェクトを最後までやり遂げる力、相手の立場を考えた思いやりのある行動が必要となる。本稿では、今年度の学習指導の在り方と学習者の

変容を示し学習効果を提案することとする。

2 研究の方法

(1) 対象生徒

広島大学附属三原中学校 9（中学3）年生
1組 41名（男子21名 女子20名）
2組 41名（男子21名 女子20名）

(2) 調査時期

平成26年5月～平成26年10月にピースプロジェクトの授業実践を行った。

(3) めざす子どもの姿

外国の方々と交流することを通して、「平和」についてより広い視野で考え、自分の身近な生活とも結びつけてより深く考えとともに、世界の中の自分や日本を意識し、世界平和に貢献しようとする子どもの育成をめざす。

(4) 単元の目標

外国の方々と積極的にかかわり、相手の方の文化や考え方を受け入れながら、相手の立場に立ったコミュニケーションをとろうとするとともに、平和についての考えを交流する活動を通して、平和に対する考えを広げ、今後の自分の身近な生活とも結びつけて行動できるようにする。

(5) 単元の評価規準

学習領域	「つながり」から	「自分づくり」から
基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力 (他者に働きかける力・他者を理解しようとする力)	自己理解・自己管理能力 (状況判断力)

価値観	共生（他者の尊重）	自律（希望・自立の重視）
評価規準	・ピースプロジェクトに向けて、班員とかかわりながら、外国の方々と共に平和について考える活動を通して、平和に対する視点を広げ、今後の自分の身近な生活とも結びつけて考え、行動しようとするようになる。	・ピースプロジェクトの取り組みにおける「自分と向き合う活動」を中心とした体験活動を通して、将来人の役に立てる自分になるために、今何をすべきかを判断し、行動しようとする。

(15 時間)

- 第4次 事前校外学習①
被爆体験を聞き、案内するコースを英語で説明しながら実際に回る(6時間)
- 第5次 相手の方に渡すウェルカムボードと色紙を作成する(6時間)
- 第6次 ピースプロジェクトに向けて学習目標を再確認する(1時間)
- 第7次 校外学習当日②
碑を案内する活動を通して平和についての思いを伝え合う(6時間)
- 第8次 平和に対する様々な考えに触れ、平和とは何かを考える(2時間)
- 第9次 事後学習
ピースプロジェクトを通して学んだことをまとめ、デジタルレポートを作成して交流する(6時間)

(6) 単元計画

- 第1次 平和についての考えを深める(5時間)
- 第2次 案内するコースを考える(3時間)
- 第3次 碑を説明するための英文の暗唱する

(7) 評価計画

時間	学習活動	領域	学習活動における具体的評価規準など	
			基礎的・汎用的能力	態度・価値観
1 ～ 5	ピースプロジェクトの概要を知るとともに、ヒロシマ及び原爆について学び、「自分にとっての平和とは何か」といった平和についての考えを深める。	自分	先輩たちの姿をビデオで見ながら、今後の見通しを持つことができる。原爆について学び、平和についての考えを深めることができる。 <状況判断力>	平和について考えることを通して、何が大切で何が課題かを考え、真剣に物事に取り組もうとする。 <希望・自律の重視>
6 ～ 7 8	昼食場所及び平和公園内にある碑を案内するコースを考える。 (事前校外学習後) 説明する碑や案内するコースを変更したりする。	つながり	外国の方々の立場を考えながら平和公園内の案内する碑を決めることができる。 <他者を理解する力>	相手の立場や文化を尊重しながら、案内する場所や昼食場所を考えようとする。 <共存共生の重視>
9 ～ 23	碑の案内に使う英文を単語カードに書き写し、碑の案内文を読んだり、暗唱したりして、英語でガイドができるようにする。 (広島大学の留学生や教員を相手に練習したシミュレーション活動も含む)	つながり	・碑の案内英文を正しく読むことができる。 ・碑の案内英文を覚えようとする。 ・碑の案内英文が相手に伝わるよう話すことができる。 <他者に働きかける力>	相手の立場を考えて、身振りや表情、アイコンタクト、話し方などを考えて話そうとする。 <他者の尊重>

24 ～ 29	平和記念公園で被爆体験を聞いて考えを深めたり、碑巡りをしたり、英語でガイドの練習をしたりする。 (事前校外学習)	つながり	碑について、英語で相手に伝えるように単語カードを用いながら説明することができる。 <他者に働きかける力>	相手の立場を考えて、碑巡りのコースや所要時間、説明する時の身振りや表情、アイコンタクト、話し方などを考えようとする。 <他者の尊重>
30 ～ 35	外国の方々にとって記念に残るようなウェルカムボードと色紙を作成する。	つながり	外国の方々の立場に立って、ウェルカムボードやプレゼントの色紙を作ることができる。 <他者を理解する力>	相手の立場を考えて、見た方に喜んでもらえる内容を考え、班で協力して作成しようとしている。 <共存共生の重視>
36	ピースプロジェクトについて学習した内容をふまえて、「なりたい自分」に近づくために、どのような行動が自分に求められ、それをどのように実行していくのかといったことを、仲間と交流することを通して、再度自分自身に向き合う。	自分	自らの課題を認識し、与えられた学習内容に真摯に向き合い、学んだことを仲間と交流することを通じて、自らの変容に接しながら、ピースプロジェクトの学習に生かそうとする。 <状況判断力>	
37 ～ 42	広島平和記念公園で、外国の方々とコミュニケーションを図りながら碑を案内する活動を通して、平和についての意見交流をする。 (校外学習)	つながり	外国の方々と積極的にかかわり、自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見も理解することができる。 <他者に働きかける力> <他者を理解する力>	積極的にコミュニケーションを取りながら、自分の意見を伝えるだけでなく、相手の意見を聞き、考えを理解しようとする。 <共存共生の重視>
43 ～ 44	外国の方々の平和に対する考えに触れ、自分の考えと比較しながら、新たな視点を見つけ「平和とは何か」を再度考える。	つながり	相手の考えや思い、夢や希望、平和への思いを理解することができる。 <他者に働きかける力> <他者を理解する力>	平和に対する様々な考え方を受け入れ、自分の考えと比較しながら、平和に対する新しい視点を見つけようとしている。 <共存共生の重視>
45 ～ 50	ピースプロジェクトの集大成として、自分自身の変容に何が影響を与えたのか、「なりたい自分」を意識しながら、今後の自分の行動に向けてその方向性を各自でレポートにまとめる。 (事後まとめ学習)	自分	「なりたい自分」に近づくために、活動を通して自分と向き合い、学んだことを仲間と交流することで、自らの変容に接し、将来、人の役に立てる自分になるために、今後の自分の行動の方向性に生かそうとする。 <状況判断力>	平和について考えることによって、将来、よりよい社会を構成する一員であり、また、人の役に立つことの必要性を認識しようとする。 <希望・自立の重視>

(8) 道徳との関連

内容項目	番号	1 - (3)	略称	誠実・責任感
ねらい	何ごとでも自分で判断し決定し実行し責任を持つ。			
内容項目	番号	4 - (2)	略称	よりよい社会の実現
ねらい	外国の方々と積極的にコミュニケーションを図り、国境を越え協力しよりよい社会の実現に向けて、一人ひとりができることを考えようとする実践的態度を養う。			

(9) 特別活動との関連

共通項目	番号	2-ウ	略称	社会の一員としての自覚と責任
ねらい	外国の方々と「平和」について意見交流をすることを通して、平和について考えを深めながら、自分の生活におきかえて考えさせる。			
共通項目	番号	2-カ	略称	ボランティア活動の意義の理解と参加
ねらい	ボランティアの意義や尊さを理解し、奉仕の精神を持って、自ら公共の福祉と社会の発展のためにボランティアを実践しようとする態度を育成する。			

(10) 教科等との関連

教科名	外国語科	単元・題材名	①Program 2 Volcanoes in Japan ②Program 4 Faithful Elephants
関連内容	①日本の名所や史跡などについて紹介する文を書き、他者に発表する。 ②戦争の悲劇や飼育係の心の葛藤を知り、戦争のない平和な世の中の素晴らしさや尊さを知る。		
教科名	社会科	単元・題材名	第二次世界大戦と日本
関連内容	沖縄の人々の立場など、戦争を多角的に見る視点を持てるように留意する。		

3 授業の実際

本稿では事前の校外実習および事後のまとめを取り上げる。

(1) 生徒実態

これまで生徒は、希望の授業で「なりたい自分になるための学習」を積んできており、7年生では福祉、8年生では広島や沖縄を題材にした単元を学習した。8年生時の12月に沖縄に修学旅行へ行き、資料館学習や糸数壕へ入り、戦争体験の講話を聞いた。そして、ピースプロジェクトにつながる学習として、沖縄での修学旅行中に、沖縄在住のアメリカ人の家庭に半日ホームステイを行い、英語を介した異文化体験を経験した。ホストファミリーとのやりとりが全て英語であったため、コミュニケーションの楽しさや難しさを実感しており、うまく行かなかった点はピースプロジェクトに生かしたいと考えている生徒が多い。

(2) 現地リハーサル実習について（5月）

現地リハーサル実習は今年度初めて実施した。これまでのカリキュラムでは、7年生時で平和公園での調べ学習を行ってきた。しかし、9年で実施するピースプロジェクトまでにかかなりの時間が経過して記憶が風化してしまうため、これまでの実践から学び直しが必要であることが分かった。また、平和学習の一貫で広島や沖縄に関する調べ学習を行ったり、沖縄で糸数壕に入ったりと学習は積んできたが、被爆体験の講話を受ける機会がなかった。広島に住む中学生として、また外国の方に英語で平和記念公園内を案内して回る立場としては、生徒一人ひとりが事実を知り、平和とは何かを考え、生徒自身がその考えを深めなければ他者に英語を使って伝えることは困難である。そこで、学習目標を2つ設定し、被爆体験の講話を聞いたり、資料館内での調べ学習を行ったりする

直接体験を行った。

- ①実際に見たり聞いたりすることで、被爆地ヒロシマについて知り、感じ平和について自分自身の考えを明確にする。
- ②ピースプロジェクトに向けて、ガイドする碑を事前に巡り、相手の立場に立った案内ができるようにする。

被爆体験の講話では、ピースプロジェクトを運営する実行委員が中心となって進めた。講話後には質疑応答が時間であったが、戦争によって奪われた多く命や目の前で命が消えていく惨状に対して何もできなかったという話に深い感銘を受けた生徒が多く、涙を流し質問できない生徒もいた。

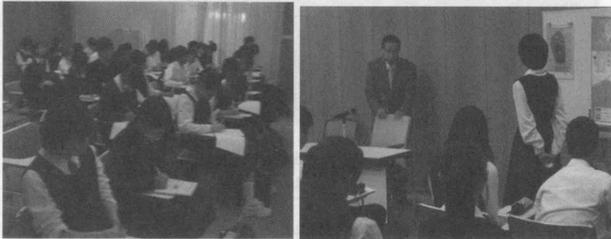


図1 被爆体験の講話を聞く様子

ピースプロジェクトは、4人のチームワークおよび連携が必須である。誰か一人が外国の方に対応するのではなく、全員で協力して案内しなければならない。特に平和記念資料館内には多くの展示物があることから、案内して回るには相手の方を気遣いながらも、時間配分にも気を配る必要がある。どんな資料がどの階に展示されているのか、どの程度その展示物を見てもらうのかも設定しなければならない。生徒たちは、本番で先生方に見てもらうコースを実際に自分たちで歩きながら、取捨選択をしていた。



図2 資料館内で班活動を行う様子

平和記念公園内には70以上の慰霊碑がある。外

国の方に英語で碑の説明をしながら巡るこの碑巡りコースは、1時間を予定している。原爆ドーム前がスタート地点で、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像の3つを周りながら、最後は平和記念資料館前に集合するのである。外国の先生方の立場に立ってどの慰霊碑を巡るか、どんな順番で回るかを班で話し合っ決めて。また、慰霊碑を案内して回る活動の前には平和記念公園の周辺にあるレストランで昼食をとる。この昼食場所を調べたり、事前に予約を入れて案内したり、昼食をオーダーする手助けをしたりするのもチームで行うのである。事前リハーサルでは、昼食を食べ終えて原爆ドームに集合した場面から平和記念資料館前に集合する設定でリハーサルを行った。碑を説明する英文を単語カードに書き、それを暗唱する学習を積んできた。当日までにはカードなしで話せることが理想だが、この日はカードがないと全く英語が話せなかった。

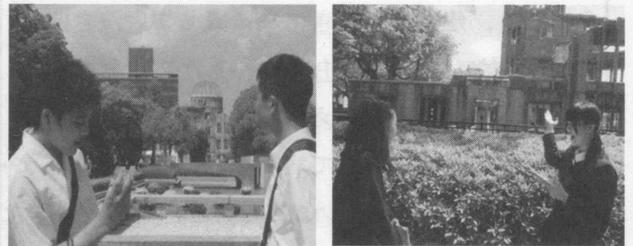


図3 碑を巡るリハーサルの様子



図4 観光客にインタビューする様子

現地でのリハーサル実習がフラワーフェスティバル直前だったこともあり、多くの外国人観光客の方、日本各地からの修学旅行生で平和公園は混雑していた。ピースプロジェクトに向けて外国の方に説明する学習を積んできていたので、生徒たちの中には、外国の方に声をかけられて話者、あるいは自分たちから平和について考えを質問す

る生徒もあり、実践的なコミュニケーション活動を意識して取り組む姿が見られた。

(3) ピースプロジェクトに向けて

5月の現地リハーサル実習を終えて、生徒が考える理想の姿を交流する時間を持った。被爆体験を聞いた生徒からの声である。

戦争の影響は、身体的な事だけではなく、精神的にも影響を及ぼすのだと改めて感じました。今まであまり知らなかった兵士のことまで分かって良かったです。戦争というものは人間を残酷なものにさせてしまいます。そして、講師の方の具体的な体験を聞いて、私は実際に体験できないけれど想像することができました。男子の多くは兵士として戦争に参加していて、小学校や中学生の子ども、そして女子までも竹やりを作ったりしなければなりません。私が印象に残っている話は、原子爆弾が落ちた後の話です。人々は蒸発してしまったり、建物の下敷きになってしまい泣き叫んでいました。しかもあちらこちらから。私だったらどうするだろうと考えてみたけど、私も泣いていると思います。そして病院などには、皮膚がなく、肉が見えていたり、ここでも泣き叫ぶ人がいたそうです。(中略) 私が1番心に残ったことは、最後に話された死者を味方につけるといことです。平和公園を出る時、「安らかにお眠り下さい」と心の中で言う事は知っていたけど、お墓参りに行って帰る時には、「私のご先祖様をどうかよろしくお願いします」と言うことには少し驚きました。亡くなった方々にはずっと生きていたかったけど、生きることができなかった。私は今後どう生きるかを考えさせられました。

リハーサル実習を終えて学習をふり返っていくと、計画していた案内のコースを変更する班が増えた。変更の主な理由は、実際に自分たちが案内することを想定して歩いた時に不便だったこと、もっと加えた方がよいと感じたこと、より相手の立場に立って考えた時に、時間をかける場所を精選しなかったことなどが主であり、自分たちが直接体験して分かったことを基にした変更であった。

5月の現地リハーサルでは、外国の方と交流する学習は予定されていなかった。そのため、計画していないことを質問された時にどうすればよいか、どんな対応がとれるのかを試せていなかった。そこで、6月27日に広島大学から短期留学生を迎えて、平和公園内にある慰霊碑を英語で説明するコミュニケーション学習を企画した。これまで暗唱してきた英文がすぐに出てくるか、相手の意識したコミュニケーションをとれるかを確認できる機会となった。

図5 班で説明や考えを述べる様子



事前学習の中で、理想とする自分たちの姿を考えた。ピースプロジェクト当日にどのような姿で行動すればよいと考えているか意見を出し合ったところ、図7の結果となった。直接体験してできていなかった点を挙げ、改善すべき点を明確にすることができた。

- アイコンタクト
 - 同意(あいづち)
 - 笑顔
 - 協力(一人に押しつけない)
 - ジェスチャー
 - 臨機応変
 - (予定外の質問や場面に遭遇したら状況を判断して行動する)
 - 配慮(無言でなく応答)
- 理想

図7 理想とする姿

(4) ピースプロジェクト当日と事後学習

7月10日(木)にピースプロジェクトを実施した。参加者は総勢21名で、米国NY州にあるマーシー大学から12名の参加があり、協力者はSheila Offman Gershさん、元国連に勤務された黒田順子さんだった。黒田さんには6月25日(水)に中学校で教育講演をしていただいた。また、アートル

の Executive Director である Christina Rose さんとご家族の2名が参加した。さらに広島大学に在籍しているアジアの留学生7名が参加した。3社から取材を受け、7月14日(月)の事後学習で、新聞を活用して当日の姿を振り返ることもできた。

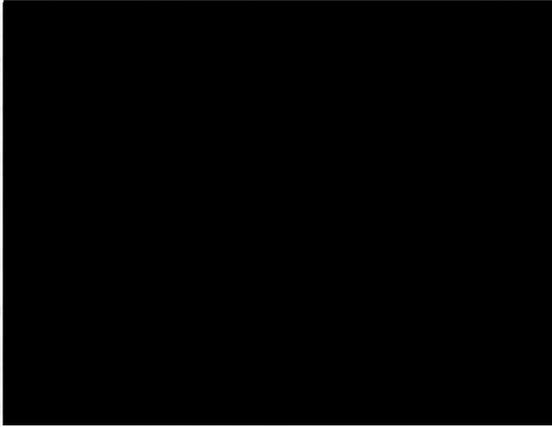


図8 読売新聞の記事

平和について意見交流をする場面で、相手の先生の見解を色紙に書いて残したので、色紙を活用して外国の方と自分たちの相違を考える事後学習を行い、自己の平和に対する考え方がどのように深まったかを振り返った。

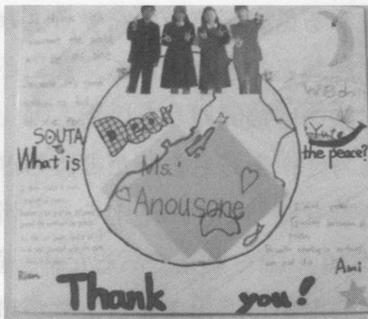


図9 生徒が送った色紙

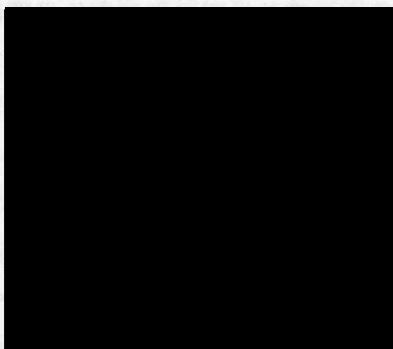


図10 先生からもらった色紙

(5) 事後学習として、自分の変容をデジタルポートフォリオにまとめ、交流する

ピースプロジェクトはプロジェクト型の学習であり、他者と協働的に行わなければならない。また、外国の方と英語でコミュニケーションを図るという直接的な体験を伴うため、班内のチームワーク、助け合いなど相手意識をいかに持って行動するかでその是非が問われる。さらには、平和に対する考えを相手に発信する場面があるので、自分で考えて終わるのではなく、他者の考えに触れ、感じながら、自分の考えを深める学習ができる。希望のデジタルポートフォリオには、平和・国際をキーワードに学んだことや考えの深まりについてまとめた。まとめた内容は次の通りである。

- タイトルをつける
- 修学旅行
 - ・平和学習（ひめゆりの塔・糸数壕・沖縄県平和祈念資料館・平和の礎などから、分かったこと、感じたこと、考えたこと）
 - ・E-アドベンチャー（出会いから昼食、その後のアクティビティから学んだこと）
- ピースプロジェクト
 - ・現地リハーサル実習から（被爆体験講話・平和資料館内の見学、碑巡りのリハーサルから分かったこと、感じたこと、考えたこと）
 - ・現地リハーサル実習を終えて、準備したり、改善したりする必要があること
 - ・個人目標とその振り返り（7月10日に向けて立てた個人目標とその振り返り）
 - ・出会いの場面から昼食、平和公園での様子（会話の内容、相手の反応、どんなことを感じ考えたか、班員の言葉や行動から学んだこと）
 - ・碑めぐりを通して
 - ・平和についての意見交流から
 - ・平和について自分の考え（自分の考え、新しく生まれた考えや考えの変化など）
- 3年間の活動を通して、これからの自分（平和、国際コミュニケーションについて、これまでの経験から学んだこと、これからのなりたい自分）

3. 成果と課題

以下、生徒がまとめたレポートの一部である。

○ 平和についての意見交流から

「平和」という言葉は抽象的すぎて、どういう意味なのかよく分かりません。相手の先生は、戦争をなくしたり、核をなくすことだけが平和ではなくて、家族を大切にしたり、異文化を受け入れ楽しく暮らすことも平和だとおっしゃっていました。私たちの意見と先生の考え方が異なっているところも納得することができました。

○ 平和のついで自分の考え

平和は、私たち一人一人が楽しく、夢と希望を持って差別のない誰もが平等な世界を築いていくことだと思います。そのために私たちの役割を考え、過去の悲劇から、未来へつなげていく必要があると思います。世界にはさまざまな人が暮らしています。お互いを尊重していくことが平和な世界へ近づいていく一歩だと思います。

○ 3年間の活動を通して、これからの自分

私は、ピースプロジェクトで学んだことがたくさんあります。(中略)私はこれから広島のことを知らない人々に向けて、広島のことを伝えていく活動をしていきたいです。そして、自分が3年間の活動を通して、これからの自分平和を作っていく一員となっていきたいです。

○ 平和についての意見交流から

私は平和とは戦争がなくなり、みんなが当たり前の生活ができることだと思っていました。しかし、私の考えはすごくスケールの大きいものでした。相手の先生は「人々は愛を忘れていて。コミュニケーションと愛がなかったからだ(だから戦争になった)」と言いました。

○ 平和に対する自分の考え

今まではスケールの大きい話ばかりでした。しかし、先生との意見交流で、小さなことからコツコツやっていくことが大切だと分かりました。平和な世界を築きあげるためには何事もコツコツやっ

ていくことが将来平和な世界を作ることへの一番の近道だと思います。まずは、周りのことと向き合いたいです。

○ 3年間の活動を通して、これからの自分

三年間で平和について学習していく中で、平和に対する考え方が変わりました。そしてもっと戦争の怖さが学べました。話や本しか今まで見たことがなかったので、実際にあったものや、体験者の方の話を聞いて、改めて戦争の恐ろしさを学びました。これからは身近なことから目をそらさずきちんと向き合うこと、そしてこの過ちを繰り返さないことを伝えていくことが大切だと思います。広島ではそういったことが学べます。核兵器を持っている国に核兵器廃絶を訴えたいです。今そういった活動をしている団体があるので、支援したいです。

生徒が書いたレポートから、成果をまとめる。

- 平和について意見交流をする場合は、相手の方の意見を文字にして書き残すと、生徒が読み返して理解することが可能となる。これによって、自分と相手の方との相違を認識することができるだけでなく、他の班にいた外国の方の考えも交流することが可能となり、より多くの方の考えに触れることができる。
- 被爆体験を直接聞くことによって、自分のこととして考え、もしも自分だったらどうなのかという意識を持つ生徒が増えることが分かった。本研究は10年続く単元であるため、過去の実践例を参考にしながら深化させることが可能である。毎年変わる交流相手の確保が危ぶまれるが、それでも当日までの事前学習および事後学習の有効性が生徒の変容としてある限り、来年度の実施に向けての取り組みを続けていきたいと考える。

<注および引用文献>

- 1) 広島大学附属三原中学校：「エスコートプロジェクト 2012-日本の中学生とアメリカン教師の対話による平和学習-Peace Education in Hiroshima2012:A US-Japan Dialogue」, 2013